

伊祖公園の森林樹木

はじめに

奄美群島以南の琉球列島の主な森林は、非石灰岩域の山地～丘陵地、台地に見られるイタジイ(スダジイ)、オキナワウラジロガシ、イジュ、リュウキュウマツ等を主とする森林と、石灰岩域の山地～丘陵地、台地に見られるガジュマル、ハマイヌビワ、ヤブニッケイ、イスノキ、シマタゴ、アカギ、オオバギ等を主とする森林の2つに大別されます。

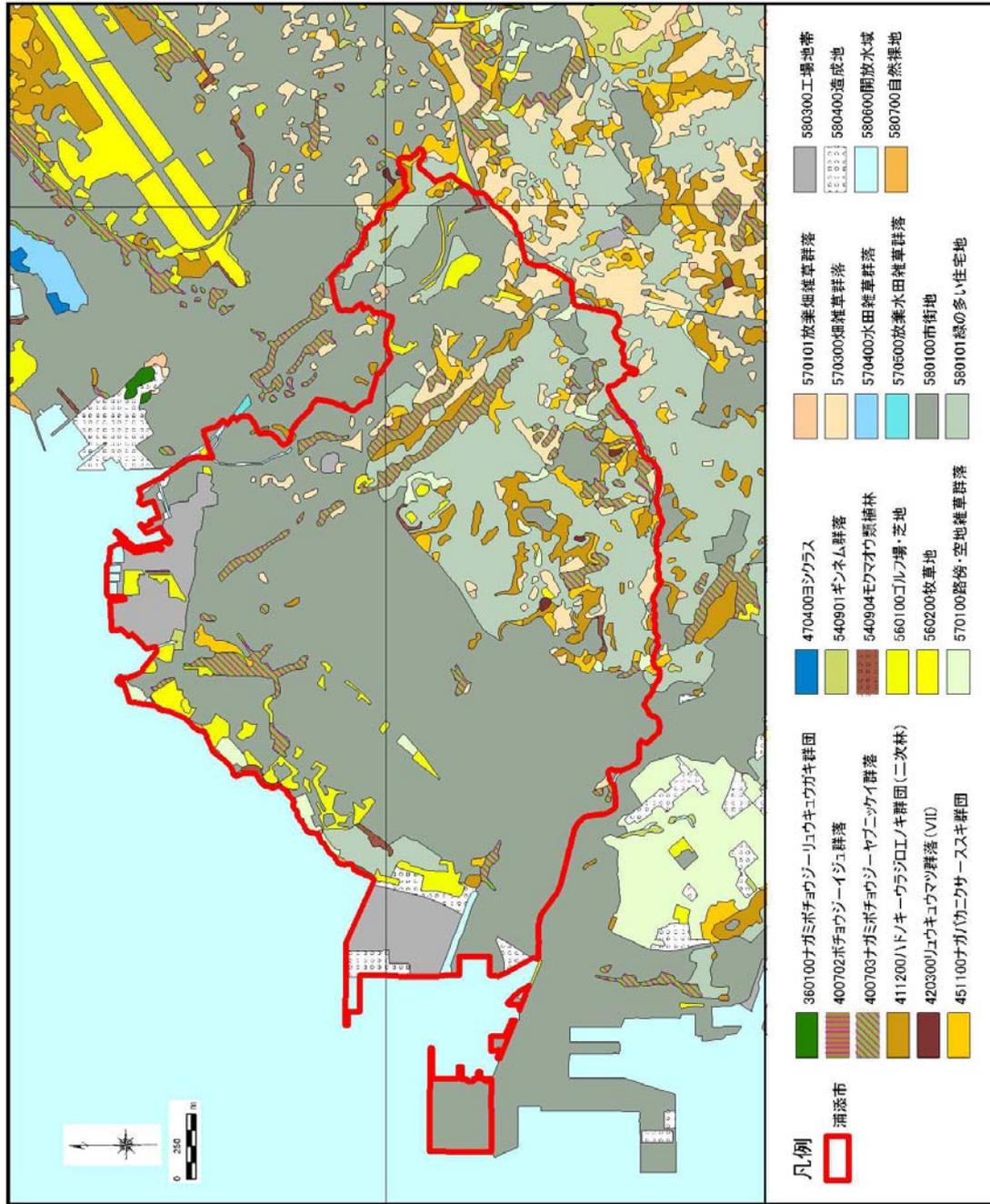
沖縄島の森林は主に中部以北の非石灰岩域と中南部の石灰岩域(北部の本部半島、国頭の一部にも石灰岩域は見られますが、これらは古期石灰岩でできており、中南部の森林とは多少異なります)のものに分けられ、中部以北のイタジイ等を主とする森林は最も大きな面積を占めています。中南部の石灰岩域の森林は、この地域が主に丘陵地、台地、平地であるため、古くから集落が発達して耕地化が進んでいたことと、沖縄戦の激戦地となり多くの部分が破壊されたため、良好な自然植生は戦禍をまぬがれた断層崖に残るものや、御嶽や城跡にあって戦後の開発等から免れてきたものだけが、小面積で見られるだけになっています。



石灰岩域の森林

非石灰岩域の森林

沖縄島南部に位置する浦添市は、南東部の経塚から沢岬にかけてと、北東部の西原等の極一部に非石灰岩の地域がありますが、ほぼ市の全域が石灰岩域であり、残されている森林も大部分が石灰岩域の森林となっています。



浦添市現存植生図(出典：環境省生物多様性センター自然環境情報 GIS 提供システム 植生調査(1/25,000 縮尺),第 6-7 回,<http://www.biodic.go.jp/trialSystem/shpddl.html>)

伊祖公園の森林は、浦添市に残された数少ない良好な森林の一つであり、沖縄島中南部石灰岩域の森林を構成する主要樹木が見られる場所です。2015年7月の調査で、植栽種や帰化種を含む201種の植物が確認されていますが、この中から主要な自生の樹木を紹介したいとおもいます。

※：以下に紹介する樹木は、石灰岩域に多く見られる樹木であって、必ずしも石灰岩域のみに見られるわけではありません。逆に非石灰岩域に見られる樹木は、石灰岩域には見られない種類が多いです。

科名	Lauraceae クスノキ科
学名	<i>Cinnamomum yabunikkei</i> H.Ohba
和名	ヤブニッケイ
方言名	シバキ
概説	常緑の高木で、高さ 10~15m になる。枝葉を揉むとわずかに芳香があり、葉はやや対生あるいは互生、卵状楕円形で全縁、縁はやや波打ち、葉先は短く尖り、革質、無毛、最下の側脈は葉の基部より少し上から左右に分かれて長く伸び、5~6 対。花は 4~5 月頃に葉の腋につき、黄緑色、果実は 10~1 月頃熟し、紫黒色。関東・北陸以西の本州、四国、九州、琉球、済洲島、台湾、中国中南部に分布。
類似種 または 関連種	似たものに樹皮や根皮から香味料を取る同じ仲間のニッケイ(方言名ガラギ)があるが、葉や枝、樹皮に強い芳香があり、葉先は長く尖り、葉の縁は波打たず、左右に分かれる側脈は葉の上端付近にまで伸びる、等の違いがある。徳之島、沖縄島、久米島、石垣島に分布し、沖縄島では北部に分布する。環境省指定の準絶滅危惧種。 沖縄島には他に、この仲間にシバニッケイ、クスノキが見られる。シバニッケイは石灰岩地には生えず、葉は小型で倒卵状楕円形、短鋭尖頭。クスノキは防虫剤としての樟脳を採取するために植栽された後に逸出したもので、葉は明らかに互生し、葉先は急鋭尖頭になる。



ヤブニッケイ 近景



ヤブニッケイ 葉(左:表 右:裏)

科名	Lauraceae クスノキ科
学名	<i>Litsea japonica</i> (Thunb.) Juss.
和名	ハマビワ
方言名	ガラサームック、チーギウトゥ
概説	常緑の小高木、高さ5～8mになる。葉は互生し、長楕円形、全縁、円頭、革質、裏面に黄褐色の綿毛を密生し、側脈は8～12対、裏面に隆起する。雌雄異株、花は10～12月頃葉の腋につき、黄色。果実は3～5月に熟し、黒紫色。本州(島根・山口)、四国、九州、琉球、朝鮮半島南部に分布。
類似種 または 関連種	沖縄島には他にこの仲間でカゴノキが分布するが、葉の形状はハマビワには似ず、倒卵状披針形、鈍頭。樹皮が剥がれやすく、鹿の子斑状になることが名前の由来である。沖縄島では北部に見られ、特に古期石灰岩域に多い。



ハマビワ 近景

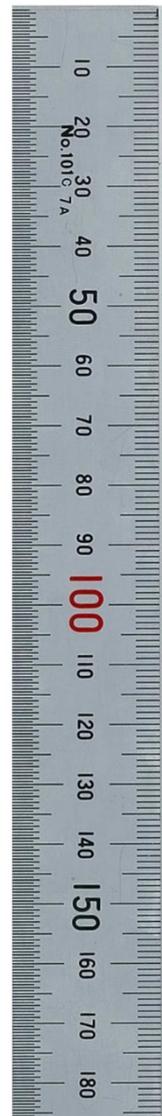


ハマビワ 葉(左:表 右:裏)

科名	Lauraceae クスノキ科
学名	<i>Neolitsea sericea</i> (Blume) Koidz.
和名	シロダモ
方言名	ヤマダックワ
概説	常緑高木、高さ 10～15m になる。葉は互生して枝先に集まってつき、長楕円～卵状長楕円形、全縁、短鋭尖頭、革質、裏面にわずかに黄褐色の毛があり、側脈は 5～6 対で、最下の脈は葉の基部より少し上から左右に分かれて長く伸びる。雌雄異株、花は 12～1 月頃葉の腋につき、淡黄色。果実は 11～12 月に熟し、赤色。花期と果期が重なるため、雌株では花と果実が同時に見られる場合がある。宮城、山形以西の本州、四国、九州、琉球、朝鮮半島南部、台湾、中国南東部に分布。
類似種 または 関連種	沖縄島には他にこの仲間でイヌガシが分布するが、非石灰岩地に生え、葉柄は長さ 1.5 cm 以下のことが多く、側脈は 3～4 対、花は春に開花し、暗赤色。果実は秋に黒紫色に熟す。



シロダモ 近景

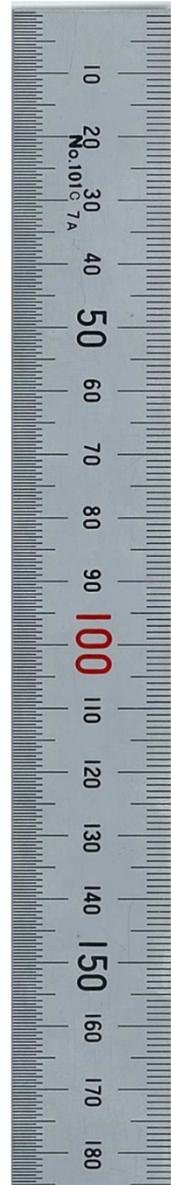
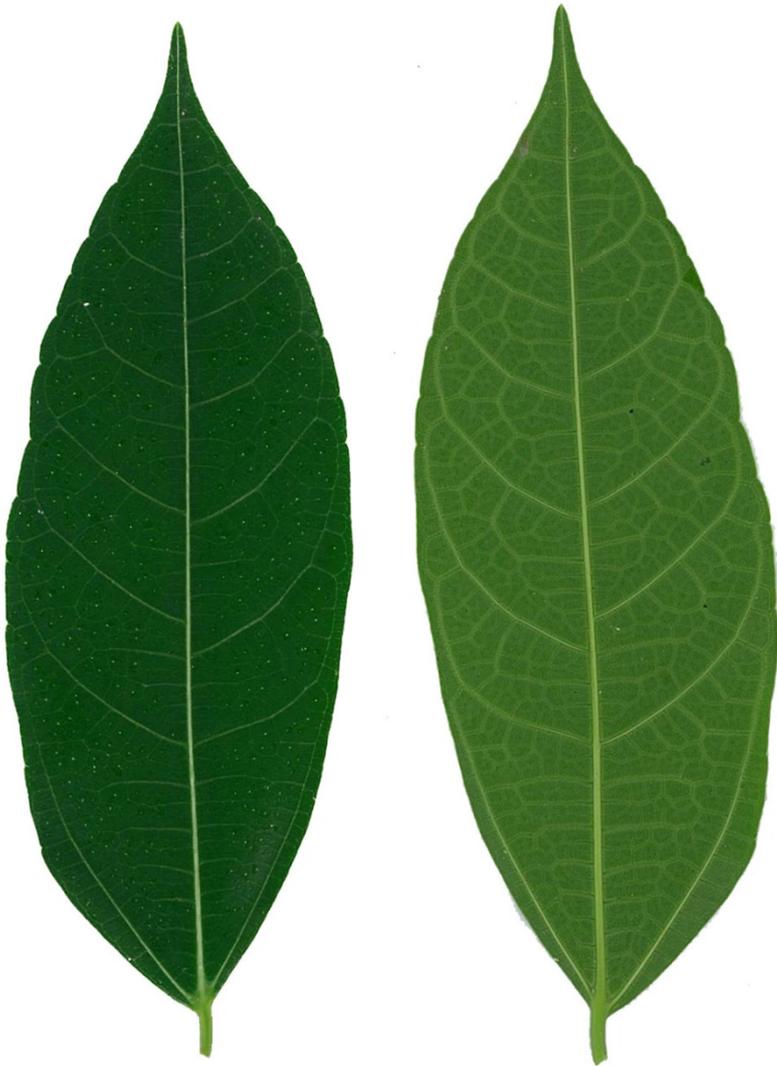


シロダモ 葉(左:表 右:裏)

科名	Moraceae クワ科
学名	<i>Ficus ampelas</i> Burm.f.
和名	ホソバムクイヌビワ
方言名	ファチコーギ、ファチコー
概説	常緑高木、大木になると幹下部に板根を形成することが多く、高さ10～15mになる。葉は互生、楕円形、全縁か不明瞭な波状縁、鋭尖頭、厚紙質、両面に点状の硬い毛がまばらにあってややざらつき、側脈は5～6対で、最下の脈は葉の基部より少し上から左右に分かれて長く伸びる。雌雄異株、花期は不定期で、葉の腋にイチジク状花をつける。果実は赤色に熟す。奄美以南の琉球、台湾、ミクロネシア、フィリピン～インドネシア、ニューギニアにかけて分布。
類似種 または 関連種	沖縄には他に類似種としてムクイヌビワが分布。 ムクイヌビワの葉はホソバムクイヌビワに比べて幅広く、両面に点状の硬い毛が密にあって著しくざらつき、果実は黄赤色に熟す。沖縄島北部、石垣島、西表島、与那国島、大東島、台湾、フィリピン、インドネシアに分布。沖縄県の準絶滅危惧種。



ホソバムクイヌビワ 近景

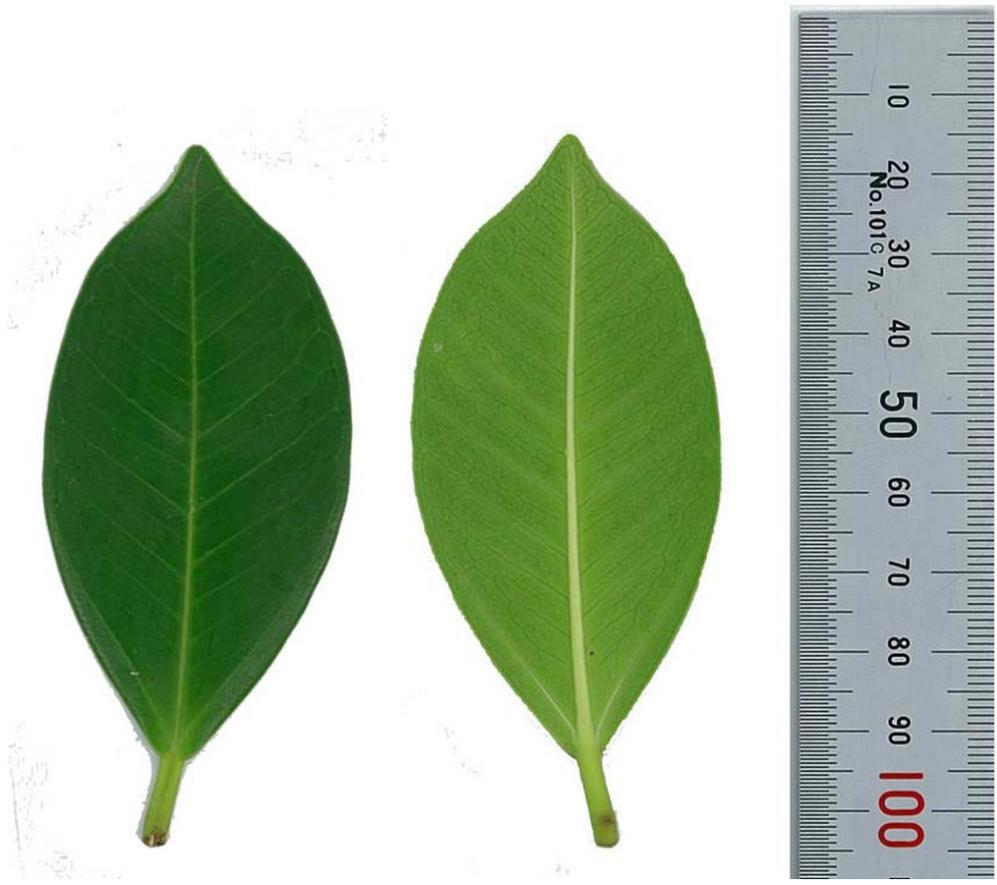


ホソバムクイヌビワ 葉(左:表 右:裏)

科名	Moraceae クワ科
学名	<i>Ficus microcarpa</i> L.f.
和名	ガジュマル
方言名	ガジマル、ガジュマル
概説	常緑高木、大木になり、高さ 20m に達する。枝から多数の気根を垂らし、その一部は地について枝を支える支柱根となる。葉は互生、倒卵～楕円形、全縁、鈍～やや鋭頭、革質、無毛、側脈は 6～8 対。雌雄同株、花期は不定期で、葉の腋にイチジク状花をつける。果実は紫褐色に熟す。屋久島以南の琉球、台湾、インド、スリランカ～中国南部～インドシナ～インドネシア、ミクロネシア、フィリピン、ニューギニア、オーストラリア北部に分布。樹幹や構造物上で発芽した苗木が気根を垂らして基物を絞め付け、占領して基の樹木を絞め殺したり、構造物を破壊することもある。
類似種 または 関連種	沖縄には他に類似種としてシロガジュマルとフィカス・ハワイが導入され広く植栽されている。シロガジュマルは枝がやや垂れ下がり、葉先は鋭尖頭、台湾以南のアジア熱帯～オーストラリア、太平洋諸島の原産。 フィカス・ハワイは葉がやや大型で、側脈は 10～12 対、オーストラリア原産。

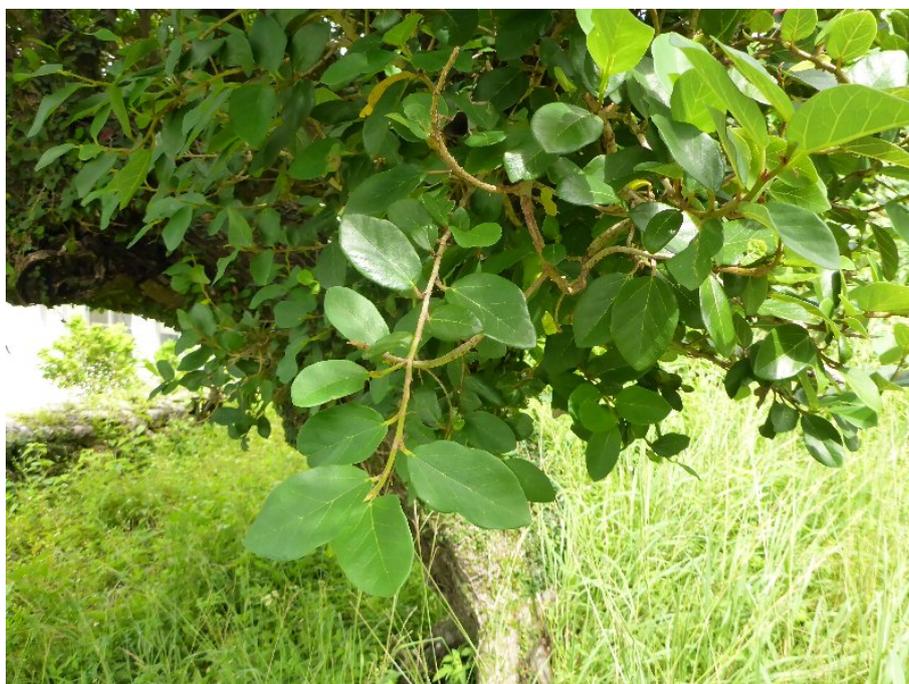


ガジュマル 近景

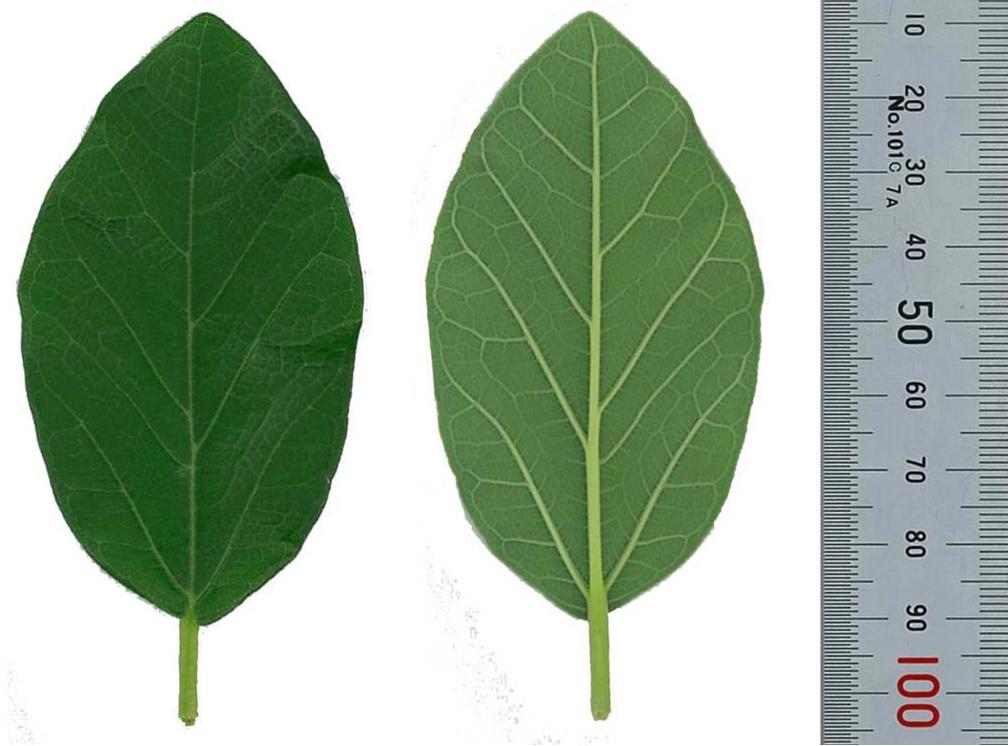


ガジュマル 葉(左:表 右:裏)

科名	Moraceae クワ科
学名	<i>Ficus pumila</i> L.
和名	オオイタビ
方言名	チタ、イシマチ、イシバーキ
概説	常緑の藤本。茎から根をだして樹幹や壁面をよじ登る。葉は互生、楕円～広楕円形、全縁、鈍～円頭、革質、裏面で脈が隆起し、脈上に短毛があり、側脈は4～5対。雌雄異株、花期は不定期で、葉の腋にイチジク状花をつける。果実は紫色に熟し、雌の果実は食用になる。本州(千葉以西)、四国、九州、琉球、台湾、中国南部、インドシナに分布。
類似種 または 関連種	沖縄島には他に類似種としてヒメイタビとイタビカズラが分布し、両種共に非石灰岩地に生える藤本。 ヒメイタビはオオイタビに似るが幼植物の葉は歯牙状の切れ込みがあり、成葉はやや鋭頭、葉柄には開出毛(オオイタビは伏毛)がある。これも雌の果実は食用となる。 イタビカズラは葉が披針状長楕円形、鋭尖頭になる。



オオイタビ 近景

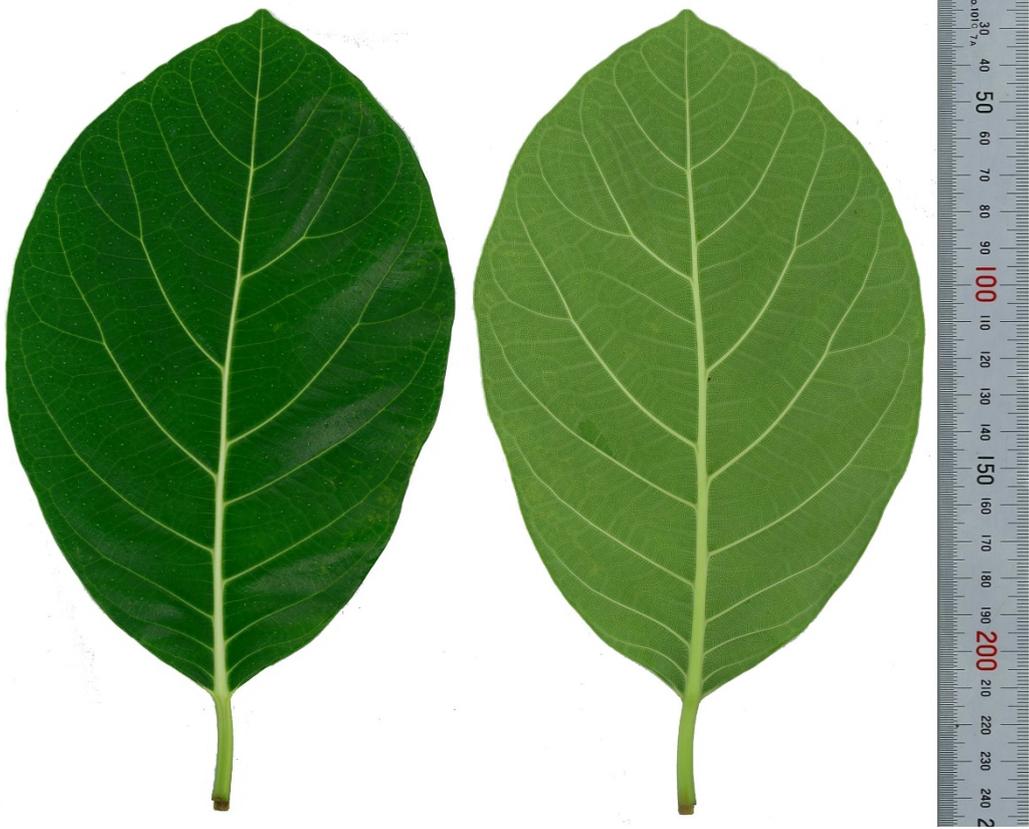


オオイタビ 葉(左:表 右:裏)

科名	Moraceae クワ科
学名	<i>Ficus septica</i> Burm.f.
和名	オオバイヌビワ
方言名	トートーギ、ウフバー
概説	常緑高木、高さ 7～10m になる。葉は互生、楕円形、全縁、鈍頭、薄い革質、無毛、側脈は 7～8 対。雌雄異株、花期は不定期で、葉の腋や枝、あるいは樹幹にイチジク状花をつける。果実は黄褐色に熟す。奄美以南の琉球、台湾、マレーシア～インドネシア、フィリピン、ニューギニア、オーストラリア北部～ポリネシアに分布。
類似種 または 関連種	沖縄島には他に類似種としてアカメイヌビワ(ハルランイヌビワ)が分布するが、非石灰岩地に生え、葉は長楕円～倒卵状長楕円形、鋭頭。葉の腋や枝、特に幹に短い枝がでて、それにイチジク状花を密につける。



オオバイヌビワ 近景



オオバイヌビワ 葉(左:表 右:裏)

科名	Moraceae クワ科
学名	<i>Ficus subpisocarpa</i> Gagnep.
和名	アコウ
方言名	ウスク、アホーギー、アコー
概説	落葉高木。大木になり、高さ 20m に達する。枝から多数の気根を垂らす、通常支柱根は作らない。葉は互生、楕円形、全縁、短鋭頭、薄い革質、無毛、側脈は 6~8 対。雌雄同株、花期は不定期で、葉の腋や枝にイチジク状花をつける。果実は淡紅色に熟す。本州(和歌山)、四国南部、九州、琉球、台湾、中国南部、インドシナ、マレーシアに分布。本種もガジュマル同様に気根で他の樹木や構造物を破壊することがある絞め殺し植物である。



アコウ 近景



アコウ 葉(左:表 右:裏)

科名	Moraceae クワ科
学名	<i>Ficus virgata</i> Reinw. ex Blume
和名	ハマイヌビワ
方言名	アチネーク、アンチャカー
概説	常緑高木。高さ 7～10m になる。枝から多数の気根を垂らす。通常支柱根は作らない。葉は互生、楕円形、基部がゆがんだ鋭形になり、全縁、短鋭尖頭、革質、無毛、側脈は 8～10 対。雌雄異株、花期は不定期で、葉の腋にイチジク状花をつける。果実は暗紫褐色に熟す。トカラ列島以南の琉球、台湾、フィリピン、インドネシア、ニューギニア、オーストラリア東北部、太平洋諸島に分布。本種もガジュマル同様に気根で他の樹木や構造物を破壊することがある絞め殺し植物である。
類似種 または 関連種	沖縄島には他にこの仲間で落葉～半落葉低木のイヌビワが分布する。気根は無く、葉は卵状楕円形で鋭頭、全縁、紙質、無毛かわずかに有毛、側脈は 6～8 対。雌雄異株。果実は黒紫色に熟し、雌の果実は食用となる。また、本種の変種にケイヌビワがあり、葉や果実に軟毛が密～やや密にある。



ハマイヌビワ 近景



ハマユビワ 葉(左:表 右:裏)

科名	Euphorbiaceae トウダイグサ科
学名	<i>Macaranga tanarius</i> (L.) Müll.Arg. var. <i>tomentosa</i> (Blume) Müll.Arg.
和名	オオバギ
方言名	クンチャーユナー、チビカタマヤーガサ、チビククヤ
概説	常緑小高木。高さ 5~10m になる。葉は大型で互生し、長い葉柄に楕状につき、広卵~卵形、全縁あるいは不明瞭な鈍鋸齒があり、鋭尖頭、厚紙質、裏面に鱗状の毛を密生し、葉柄の着点から放射状に出る 5~8 本の側脈がある。雌雄異株、花は 3~5 月に葉の腋につき、緑黄色。果実は 6 月頃に白く熟す。奄美以南の琉球、台湾、インド東部~中国南部~マレーシア、インドネシア、フィリピン、ミクロネシア、オーストラリア北部に分布。伐採跡地や崩壊跡地に真っ先に侵入して早く生長する先駆樹種である。



オオバギ 近景



オオバギ 葉(上:表 下:裏)

科名	Euphorbiaceae トウダイグサ科
学名	<i>Mallotus philippensis</i> (Lam.) Müll.Arg.
和名	クスノハガシワ
方言名	アカマミク、スルスルバー
概説	常緑小高木。高さ5～10mになる。葉は互生、卵状長楕円～狭卵～披針形、全縁～波状縁、鋭尖頭、硬紙質、裏面に微毛があり、最下の脈は葉の基部より少し上から左右に分かれて長く伸び、4～5対。雌雄異株、花は2～4月、上部の枝にある葉の腋につき、雄花は淡黄色、雌花は紅色。果実は5～8月に紅褐色に熟す。トカラ列島以南の琉球、台湾、パキスタン～中国南部～マレーシア、インドネシア、フィリピン、ニューギニア、オーストラリア北部に分布。
類似種 または 関連種	沖縄島には他にこの仲間で、落葉～半落葉、小高～高木になるアカメガシワが分布する。アカメガシワは葉が倒卵状円～広卵形、全縁～3浅裂、紙質、葉の両面に星状毛がある。春の新葉は紅色が目立つ。



クスノハガシワ 近景

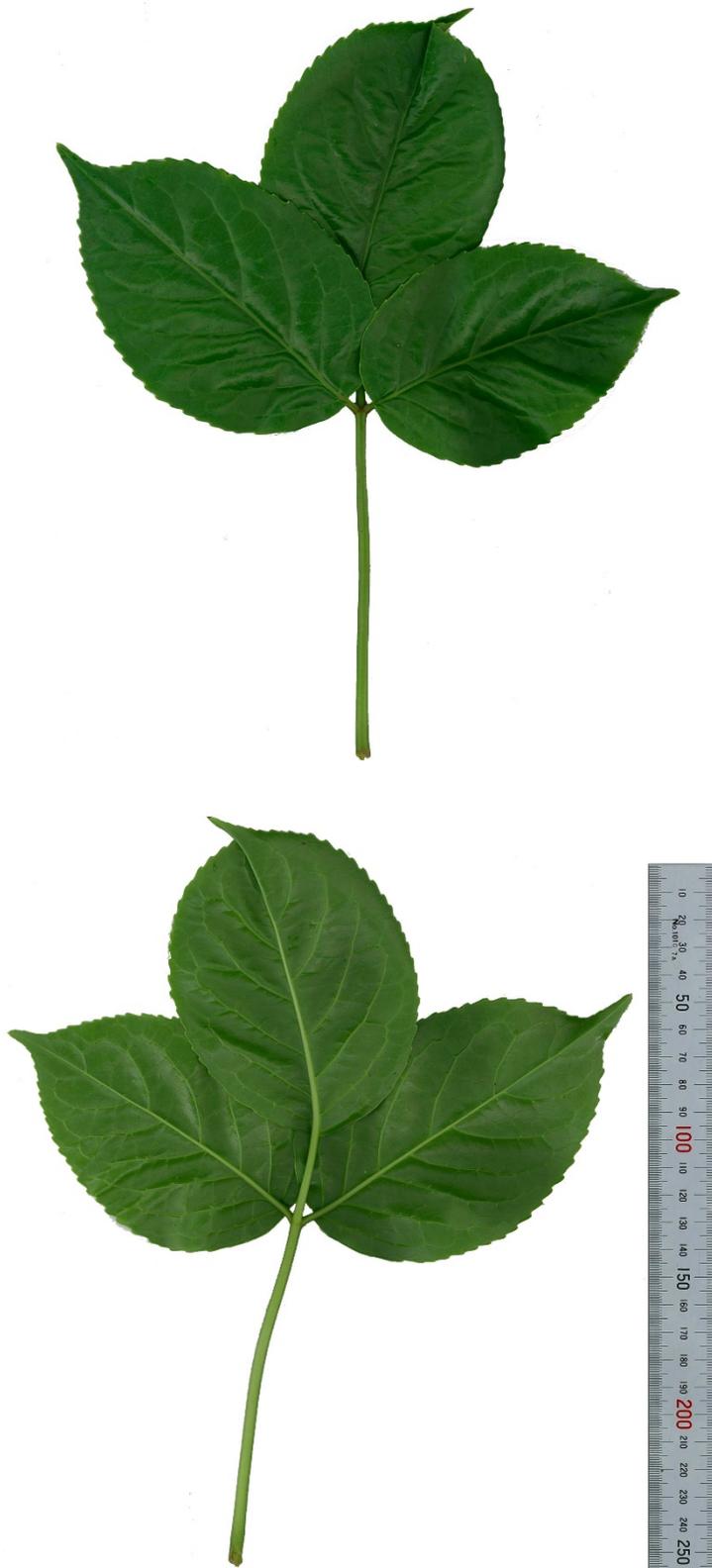


クスノハガシワ 葉(左:表 右:裏)

科名	Euphorbiaceae トウダイグサ科 (近年の分類では Phyllanthaceae コミカンソウ科とされる)
学名	<i>Bischofia javanica</i> Blume
和名	アカギ
方言名	アハギ
概説	常緑高木。高さ 25m になる。葉は 3 出複葉、互生、小葉は卵～卵状楕円形、鈍鋸歯縁、鋭～鋭尖頭、薄い革質、無毛、側脈は 6～7 対。雌雄異株、花は 2～4 月に葉の腋につき、緑色。果実は 11～1 月に褐色に熟す。沖縄島以南の琉球、台湾、インド、スリランカ～中国南部～マレーシア、インドネシア、フィリピン、ニューギニア、オーストラリア北部、太平洋諸島に広く分布。本種は各地で野生化が報告されており、本来の原産地がはっきりしていない。日本でも奄美諸島と小笠原諸島で野生化しており、特に小笠原諸島では在来植物の生育地に広範囲に侵入して問題となっている。



アカギ 近景



アカギ 葉(上:表 下:裏)

科名	Ebenaceae カキノキ科
学名	<i>Diospyros maritima</i> Blume
和名	リュウキュウガキ
方言名	クルボー
概説	常緑小高木、高さ 8～10m になる。葉は互生、楕円形、全縁、鈍頭、薄い革質、無毛、側脈は 8～10 対。雌雄異株、花は 6～7 月に葉の腋につき、白色。果実は 10～11 月に黄色に熟し、有毒。徳之島以南の琉球、台湾、中国南部～マレーシア、インドネシア、フィリピン、ニューギニア、オーストラリア北部、メラネシアに分布。
類似種 または 関連種	沖縄島には他にこの仲間で、常緑樹のリュウキュウコクタン(ヤエヤマコクタン)、トキワガキ、落葉樹のリュウキュウマメガキ(シナノガキ)が分布する。 リュウキュウコクタンは、葉は倒卵～倒卵状楕円形、鈍～円頭、厚い革質。クロキの名で親しまれて植栽され、八重山諸島に多く自生し、各地に野生化している。環境省の準絶滅危惧種。 トキワガキは、葉は長楕円～広披針形、短鋭頭、革質、非石灰岩地に生える。 リュウキュウマメガキは、葉は楕円～卵状楕円形、短鋭尖頭、紙質、無毛、葉裏は灰白色。



リュウキュウガキ 近景



リュウキュウガキ 葉(左:表 右:裏)

科名	Rubiaceae アカネ科
学名	<i>Psychotria manillensis</i> Bartl. ex DC.
和名	ナガミボチョウジ
方言名	アザカ
概説	常緑低木。高さ 2～3m になる。葉は対生、倒卵～倒卵状長楕円形、全縁、鋭頭、革質、無毛、側脈は 7～12 対。花は枝先に 5～8 月に咲き、緑白色。果実は 10～12 月に赤く熟す。トカラ列島以南の琉球、台湾(蘭嶼)、フィリピンに分布。
類似種 または 関連種	沖縄島には他にこの仲間で、ボチョウジとシラタマカズラが分布。 ボチョウジはナガミボチョウジに似るが、葉は長楕円形で、側脈は 8～10 対、主脈は葉の表面でナガミボチョウジ程大きく突出しない。通常非石灰岩地に生える。 シラタマカズラは藤本で、茎から根をだして樹幹や壁面をよじ登り、葉は小さく倒披針～倒卵状長楕円形。果実は白色に熟す。



ナガミボチョウジ 近景



ナガミボチョウジ 葉(左:表 右:裏)